

# ビデオ 通信

2022年  
1月20日(木)  
No.4537

月・木曜日発行  
月額：¥11,000(税込：¥11,880)  
発行：飯澤剛  
編集：齋藤浩一

**ユニ通信社**

〒114-0024  
東京都北区西ヶ原3-57-17-202  
TEL：03-5422-7515  
FAX：03-5422-7516  
E-mail：vt@uni-press.net

映学社

## 認知症啓発映画『「やさしく」の意味』が監督賞

「ダイヤモンド・スター国際映画祭」授賞式で高木監督がビデオメッセージ  
渋谷では『フクロウ人形の秘密』上映会 & 講演

(株)映学社 代表取締役社長の高木裕己氏が、認知症啓発のため制作統括した短編映画『「やさしく」の意味ーおばあちゃんは認知症だったー』により、マレーシア・ペナンで開催された第1回「ダイヤモンド・スター国際映画祭」において最優秀短編映画監督賞を受賞した。同作品は、2019年教育映像祭 優秀作品賞をはじめ国内外で数多く受賞しているが監督賞の受賞は初めて。2021年11月20日に現地ホテルで



授賞式にメッセージ動画で参加した映学社の高木裕己監督

開催された授賞式には、高木監督が日本からビデオメッセージで参加。〈この映画を通して「やさしさの意味」が全世界に広がっていけばと願っている〉など、受賞の喜びを語った。一方、12月21日には、令和3年度教育映像祭 優秀作品賞とインド・フレンチ国際映画祭 最優秀児童映画賞をW受賞した『フクロウ人形の秘密』の上映会が東京・渋谷区役所内で開催され、作品を上映するとともに同作品の制作統括・監督をつとめた高木氏が、児童劇映画や子どもの作文の映画化に対する考え、作品に込めた思いなどについて語った。

この映画を通して “やさしさ” が全世界に広がっていけば



「ダイヤモンド・スター国際映画祭」は、マレーシア映画業界で高評価を得ている映画監督ドン・ホー氏が企画し、新型コロナの影響で開催が延期されていたもので、ペナン州政府とペナン映画協会がサポート・パートナーとして参加している。

第1回「ダイヤモンド・スター国際映画祭」の授賞式(←写真)は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で

開催が延期されてきたが、2021年11月20日にリアル開催された。地元の有名映画アーティスト、配給会社、プロデューサー、監督などとの交流会が行われ、現地のメディアやインターネットライブTVが取材、配信を行った。

『「やさしく」の意味』で制作統括・監督をつとめ、最優秀短編映画監督賞を受賞した高木氏は、日本からビデオメッセージの形で参加し、〈今、日本では、65歳以上の高齢者の5人に1人は認知症だと言われており、小学校の時から認知症についての勉強をしているが、家族の中に認知症の高齢者がいたら、子どもでも「どう接したらいいか」に迷いながら暮らしている。この映画は、そうした背景から生まれた作品。認知症のお年寄りに、日常の色々な行事や出来事を言葉だけで伝えるのではなく、カードに文字や絵を書いてコミュニケーションをとっていく。これがこの主人公の「やさしさ」だった。そのやさしさが、この映画を通して全世界に広がっていけばと願っている。今回の受賞で、また、新しい企画に挑戦する意欲が出てきた〉とコメントを述べた。

『「やさしく」の意味』は、福井県敦賀市で開催された「小中学生の認知症サポーター作文コンテスト」で最優秀作品に選ばれた小学生（当時）の作文を脚色し、ドラマ形式の教育映画にしたもの。近い将来、超高齢化社会を迎える日本の実情を紹介しながら、1人1人がどう行動すれば良いかを示していく作品で、今回の映画祭のほか、2019年教育映像祭 優秀作品賞、ドゥルック国際映画祭功労賞、ラージュドール国際映画祭月間優良賞、アコレード映画祭特別功労賞、クラウンウッド国際映画祭公式選定、ホワイトユニコーン映画祭公式選定、ロンフォード国際映画祭公式選定、ヘルシンキ教育映画祭公式選定等を受賞するなど、国内外で高い評価を得ているが、監督賞を受賞したのは初めて。また、主演女優の栗本有規の熱演にも高評価の声が集まっており、今回も最優秀女優賞にノミネートされている。



#### 今後は「人権」が映学社が制作する映像の大きな柱に



高木氏は、今回の受賞を含めて同作品が国内外で高く評価されたことについて〈最先端である日本の認知症対策は世界でも注目されています。子どもの作文をベースに“子どもの主観”を軸にした「児童劇」として紹介するスタイルは珍しいのではないかと思います。全国キャラバン・メイト連絡協議会の認知症サポーター養成講座は全国で約1000万人が受講していますが、小学校の頃から認知症について学び、子どもでも認知症のサポートができるという自信を与えていくことが大事です。『「やさしさ」の意味』では、主人公の小学生が認知症の曾祖母と言葉だけでなく、子どもが独自に作ったカードによってコミュニケーションをとり、それが「やさしさ」につながりました。作品には大人が忘れてしまったことを、子どもがあぶり出してくれるような行為や言葉を随所にちりばめています。認知症との付き合い方のポイントを具体的に描くことができたと思っています。また、認知症の方の人権に配慮した接し方にも触れています。当社はこれまで、交通や災害をメインテーマに映像制作を行ってきましたが、今後は“人権”も大きな柱になっていくと考えています〉と話している。なお、同社では現在、沖縄県石垣島出身の中学生が書いた作文をベースにした『私は平和の教科書になりたい』（仮）の制作に向けて準備を進めているという。

## 『フクロウ人形の秘密』 W 受賞を記念した上映会



一方、12月21日には同社が進めている“子どもの作文の映画化”第5弾で、「再犯防止」をテーマにした短編映画『フクロウ人形の秘密』の上映会が、東京・渋谷区役所内の大集会室で開催された（←写真）。

『フクロウ人形の秘密』は、第68回“社会を明るくする運動”作文コンテスト小学生の部で法務大臣賞を受賞した小学4年生が書いた作文をベースに、今日的な再犯防止の

問題を加えて脚色、“子どもの主観”で捉えたドラマとなっている。

ドラマ制作ではこれまで許可されなかった少年刑務所内での撮影も実現するなど、法務省が全面協力しており、シナリオ制作には更生保護法人 両全会理事長の小畑輝海氏と渋谷区保護司会前会長の木村 清氏が協力している。

## 子どもの作文の「心を動かす一言」で映像のイメージが膨らんでいく

今回の上映会は、同作品が令和3年度教育映像祭 優秀作品賞およびインド・フレンチ国際映画祭 最優秀児童映画賞を W 受賞したことを記念して企画されたもので、当日は保護司会の関係者など約50人が集まった。上映に先立って渋谷区保護司会 会長の伊藤一三氏があいさつしたのに続き、同作品の制作統括・監督をつとめた高木裕己氏による講演が行われた。



高木氏は「今、こうした短編映画を観る機会は少なくなっている。

私は子どもを主人公にした「児童劇映画」を制作しているが、以前は情操教育の一環として、こうした映画が沢山作られていた。私は小さい頃に観た児童劇映画に感動し、「何とかあのような映画を作りたい」という思いを抱き、東映教育映像部で脚本・監督として様々なジャンルの映画を制作



した後、映学社を設立した。よく「2500文字くらいの子どもの作文をどのように映画にするのか？」と聞かれるが、『フクロウ人形の秘密』では、「こんなにかわいいフクロウ人形を作った人が何故、犯罪を起こしてしまったのか」という子どもの率直な疑問が私の心に刺さり、「これは映画にできる」と確信した。このような「心を動かす一言」があると、映像のイメージがどんどん膨らんでいく。作文の中から“子どもが心を動かしている”部分をできるだけ拾い出し、ブロックごとにエピソードを挟み込んで1つのストーリーを作り出す。今回は小畑理事長や木村前

会長から聞いた実際の保護司の話を取り込みながら、物語を作り上げていった」と述べた。また、小畑理事長は「映画には木村保護司の実体験が生かされ、その情熱がそのまま表されている。共生と更生保護に関わる映画なので、沢山の保護司や関連団体の方々に見ていただきたい。一般の方々に理解してもらうためにも、非常に良い作品だと思う」と語った。

◇映学社 <https://www.eigakusya.co.jp/>